『失恋映画』

作者　淺羽　一

この月を今この瞬間に眺めている人間が、世界には一体どれだけいるんだろう。
そんなことを考えながら歩いていたら、アスファルトの割れ目に躓いて転びかけた。
夜中なのに影が伸びる。そんな世界でまん丸の月に見とれて怪我をする。さすがにそれはせっかくの雰囲気を台無しにしただろうから、ぎりぎり助かったわけだ。
せめて、こんな夜くらいは感傷に浸ったって良いだろう。せめて、今夜くらいは映画の主人公みたいに気取ってみたって良いじゃないか。美しいラブストーリーであれば、失恋だって綺麗な物語になるはずだ。情けない男が振られるだけのコメディーじゃ、観客はともかく主役があまりにも哀れすぎる。
渡すはずだった一輪の薔薇は、よれよれになった包装紙の中でも凛と咲いている。徹夜で考えた会話の流れは、結局、二言目からあっさり破綻して価値を失い、それからは下手くそなアドリブのせいで届けたい想いのおよそ半分も伝えられなかった。
メールと電話、食事の誘いをするならどっちだろうかと考えて、迷った末にメールにした。いきなり口下手な人間が電話をしてデートを申し込むよりも、向こうの都合の良い時にゆっくりと練り上げた文章を読んで貰う方が良いと思ったからだ。要するに、初っ端から臆病風に吹かれたのだ。代償は、後の惨めさと自己嫌悪だった。
一日遅れの返信メールはとても簡潔な内容で、もしも浮かれ気分に酔うことなく冷静に判断出来ていたならば、もしかしたら事前に気付けていたかも知れない。
待ち合わせ場所は定番の広場にした。分かりやすくしたかったから、と言うのは言い訳で、本音は期待していたのだ。同じ様な目的を持った男女が少なからずいる場所で、ドラマの一場面でも使えそうな場所で、そこであればちょっとくらいの野暮ったさは覆い隠されてしまうだろうと。実際は、浮き彫りにされてしまったけれど。
やがて現れた彼女は、美しかった。それも、いつにも増して魅力的に見えた。それだけは決して贔屓目や錯覚じゃない。そしてそうだったからこそ、心優しい彼女の気遣いが、或いは女としてのプライドが、何よりも辛いものになった。
ごめんなさいと、開口一番、そう言われた。綺麗だねと、照れくささに耐えて告げた言葉に対する応えだった。場を和ませようとおどけて差し出した赤い薔薇が、深く腰を折られた彼女の背景にぽつんと浮かんでいた。
ちょっと早いけどそろそろ行こうか。順番待ちをしていた声が麻痺した声帯に弾かれて食道を落ちていった。胃が重たくなり、肺が苦しくなった。
ややあって顔を上げた彼女は、泣きそうな顔をしていた。それが喩えようもなく悲しそうだったから、泣きたいのは自分の方だと言いたい感情は、即座に罪悪感へと取って代わられた。
果たして、好きだと伝えてから断られる方が楽なのか、それとも何も言わない内に好きな人がいるのと教えられる方が楽なのか。
こう言うことは、メールじゃなくて、ちゃんと伝えなくちゃいけないと思ったから。真剣な眼差しを向けてくる彼女の言葉に、最早、何も返せなかった。もしもあの時、メールでなく電話で誘っていたならば、彼女はどんな反応をしてくれていたのだろう。
周囲では夜の始まりを祝うかのように、幸せそうな男女のカップルがいて、早くも友人同士で盛り上がっているらしい声も聞こえて、道路を走る車のエンジン音までもが普段よりも軽そうに響いていた。それなのに、彼女はもう一言も発さず、身の回りの空気だけが

凍りついたみたいに音を失っている。彼女の姿が視界に映った瞬間に鼓膜へ届いていた心臓の音まで、余韻すらなく消えていた。

停止した時間を再び動かすのは、自分の役目だと分かっていた。どう足掻こうと巻き戻せないものであれば、せめて先に進めるしかない。許されるなら、ずっとこのまま停まっていればいいのにとさえ思うけれど、それを言葉にするにはあまりにも彼女の姿が切なすぎた。

最後くらい格好良く決めなければと思ったわけじゃない。ただ、彼女の前でくらいは強がっていたかったのだ。それで、いつか彼女がこの日を思い出した時、ほんの少しでも惜しかったと感じてくれれば良いのに、なんて、そんな風な慰め方しか自身を肯定する方法を知らなかった。家で一人、無機的な失恋メールを読んでいたなら、きっと恥も外聞もなく泣いていた。

せめてこれだけでもと改めて差し出した花を、しかし彼女は受け取らず、残念だなぁと必死で笑顔を取り繕った。彼女は最後まで表情を明るくしてくれなかったものの、それでもやがて僅かに眼差しを柔らかくしてくれたから、せめてもの救いを一つ挙げるとすれば、それだった。

先に歩き出したのは彼女だった。今日はありがとう、そう告げると、彼女は困った風にお辞儀をして帰っていった。終わりを促したのは自分の方なのに、離れていく背中を一歩も動けずに見つめながら、ただの一度でも振り返られたら走って追いかけて、情けない姿をさらしてしまうんじゃないかと思っていた。それは幸か不幸か、足早に去っていく彼女が立ち止まってくれることは二度と無かった。ようやく足を持ち上げられるまで、交差点の信号は何度も何度も色を変えていた。

帰り道、とにかく上を向いて歩き続けた。速度は一定に、寄り道せず、電車もタクシーも使わずに。どれだけ時間が掛かってもそうしたい気分だった。

幸せになれよ、と試しに呟いてみてから、それは誰に向けての言葉なんだろうかと自問自答して、だけどすぐに考えることを止めた。徐々に足が疲れてきていたのに、息も上がってきていたのに、いつしか笑っていた。明るい自然な笑顔には程遠い、苦い苦い笑みだっただろうけれど、それでも笑えている感触があった。

仮に今、ここでいきなりカメラを向けられたら、出来上がる写真はいかにも失恋直後の男を撮影したものであるのかも知れない。でも、それは同時に、例えばレンタルビデオ店の片隅で見つけられそうなものでもあったはずだ。日本語吹き替えのない、本数だって一本か二本くらいの海外映画で構わない。知っているのは映画通で、もしくはちょっと変わった暇人で、出ている役者もマイナーで、だけど実は優しい脚本の名作だったりする。

街を出て、喧噪から離れ、静かな背景に足音が溶ける。まん丸の月が浮かぶ世界と一つになる。

家に着くまでもうしばらく。この月を今この瞬間に眺めている人間が、世界に一体どれだけいるのか知らないけれど。今日だけで構わない、せめてそれまではその中の一人として、真っ赤な薔薇の似合う男でいようと決めた。

〈了〉